

令和元年度「読むこと部会」研究報告

読むこと部会部長：不破中学校 小宅 陽久

今年度の研究の方向

【令和元年度 中国研 研究主題】

生きてはたらく言語能力の育成 ～言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して～

【令和元年度 読むこと部会 研究主題】

文章を主体的に読み深め,自分の考えを伝え合う生徒の育成 ～自分の考えを形成する学習過程に重点をおいた「読むこと」の指導の工夫～

【研究仮説】

「読むこと」に関わる単元の学習を通して、単元及び単位時間において意図的かつ効果的な言語活動を位置付けたり、付けたい力を明確にしたりすることで、より主体的、目的的に読み深める力や言語活動のなかで読み取ったことをもとに形成した自分の考えを、根拠をもって適切に伝え合い、豊かに表現する力を育むことができる。

【目指す生徒の姿】

- ◎読み方が分かり、目的をもって主体的に読むことの学習に取り組むことができる生徒
- ◎言語活動を通して、読む力の伸びを実感し、習得したことを活用できる生徒
- ◎言語活動を通して形成した自分の考えを根拠をもとに適切に伝え合うことができる生徒

【研究内容】

(1) 指導計画の工夫

- ①「生きてはたらく言語能力」の更なる明確化と中国研ホームページを活用した情報の共有
 - ・「生きてはたらく言語活動一覧表」の具体的な実践と加筆修正
 - ・「読むこと」における実践の黒板写真、授業資料のホームページアップ **分担して実践を集積**
- ②学ぶ魅力・必然性のある教材開発
 - ・「読みたい」「読まなければならない」といった学びに向かう力を大切にした教材開発・題材開発の工夫 **「考えの形成、共有」の学習過程を重視した指導計画を作成し、実践すること**

(2) 指導・援助の工夫

- ①生徒が「主体的・対話的で深い学び」を獲得するための指導の工夫
 - ・「読むこと」の学習における学習形態の工夫 **付けたい力を明確にした言語活動を確実に設定すること**
 - ・「読むこと」における仲間との交流方法の工夫(交流の意図や視点の明確化)
- ②「どの子」にも「生きてはたらく言語能力」を身に付けるための手立ての工夫
 - ・「苦手を克服するための手立て」「得意を伸ばす手立て」を踏まえた授業の創造

(3) 評価の工夫

- ・単位時間、単元の終末に「確かに読み取れた」「考えが深まった」という実感をもつことができる場の設定

令和元年度「読むこと部会」の実践

今年度も、読むこと部会では「自分の考えの形成」を重点とした実践を積み重ねてきました。平成29年度に岐阜県で行われた全国大会の実践を土台として、「①付けたい力を明確にした言語活動を確実に設定すること」、「②『考えの形成、共有』の学習過程を重視した指導計画を作成し、実践すること」の二点に重点を置き、実践を積み重ねてきました。

【実践の内容】

実践Ⅰ 渡辺 孝充教諭【大垣市立東中学校】

○単元名「状況の中で『故郷』」

○教材名「故郷」(光村図書 三年)

※言語活動 →登場人物の生き方について「どうあるべきか」を考え話し合う。

※付けたい力→中国社会を描いた「故郷」を読むことを通して、現代に生きる自分たちとは異なった時代・国で暮らす人々の見方や考え方に触れ、自分たちの社会や人間そのものの在り方についても思いを巡らすことで、確かな思想を形成し、豊かな心情を養っていく。(読むこと エ)

本単元は、義務教育修了を間近に控えた生徒たちが、「故郷」を題材として「置かれた状況の中で人はいかに生きるべきか」を考えることを重点としました。これからの日本社会で生きていくための指針をもつことは、大きく意義をあることであると考えました。教材「故郷」の主題を読み取り、そのうえで現代社会に目を向けながら、そうした生き方の指針を探っていくことを通して、「自分の考えの形成」に関わる力の定着を図っていきました。

(1) 強い課題意識をもつための手立て

単元を通して「登場人物の生き方について『どうあるべきか』を考え、話し合う」という言語活動に取り組みました。ルントウとの再会の場面では、「旦那様!……」という発言を中心に、その発言を巡る複数の登場人物の言動に注目し、それぞれの登場人物の生き方について考えました。作品のなかでも印象的な本場面では「自分だったらどんな言動をとるだろうか」という意識をもちながら、単元の言語活動を意識しながら自分の考えをもつことができました。

(2) 考えを練り合い、深めるための手立て

登場人物の言動・生き方に対する考え方を深めるために、『私』の母の生き方について、どのように考えるか。」と問いかけた。それによって、「願いを失わず、その実現に向けて行動を重ねている」という「私」の母の生き方の価値や、そんな「私」の母ですら社会の状況は受け入れるしかないという「私」やルントウの置かれていた現実の厳しさに気付くことができた。子の手立てによって、生徒は「私」とルントウが葛藤を経てそれぞれの言動を行っていることに気付くことができました。

実践Ⅱ 山田 優貴教諭【大垣市立興文中学校】

○单元名「つながりの中で」

○教材名「大人になれなかった弟たちに……」（光村図書 一年）

※言語活動 → 厳しい時代や状況を生きた人物の姿から、自分のものの見方や感じ方を見つめ直す。

※付けたい力 → 文章を読んで理解したことに基づいて、自分のものの見方や感じ方を見つめ直し、自分の考えを確かなものにする事ができる。（読むこと オ）

（１）課題解決に向け、視点を明確にしたり対話したりする場の設定

対話を通して、自分の考えとの共通点や相違点を聞き分け、共感する部分、批判する部分、疑問を持つ部分などを明らかにすることができました。それによって新たなものの見方を発見したり、様々な視点から物事を考えたりする生徒が多くいました。また、その際に思考したことを矢印でつないだり、相違点をメモしたりすることで、自分の考えを確かなものにする事ができました。

（２）考えを再構築できる学習過程の工夫

自分の考えを再構築するために「広がった」「深まった」という視点を生徒と共有しました。

「広がった」…自分にはなかった視点をもつことができた場合

「深まった」…仲間の考えも踏まえて自分の考えをもつことができた場合

グループ交流の時間を設定し、自分の考えを述べる場を全員に設定することで思考し続ける姿を生み出せるようにしました。さらに、自分の考えに対して仲間から意見をもらうことで妥当性を確かめたり、視野を広げたりすることができました。その際には、「本文」「体験・見聞」「他の情報」の三つの視点を設け、それを意識して意見交流をすることで考えを再構築することができ、自分の考えが「広がった」「深まった」という実感を多くの生徒がもつことができました。

【成果と課題】

○読むこと部会での実践交流や各地区の授業実践を通して、「自分の考えの形成」を重点とした実践が積み重ねられていることが分かりました。教材文の特性の理解と適切な言語活動の設定により、生徒は教材となる文章を大切にしながら、自分の経験や社会生活等と関連させて自分の考えをもつことができるようになってきていると感じています。また、そのような「自分の考えの形成」の土台となるのが、教材となる作品についての深い理解です。文学的文章であれば、作者が作品に込めた願いや叙述の意図等を丁寧に読み深めていくことで自分の考えより豊かで確かなものになると考えています。今回実践を掲載いたしました渡辺先生、山田先生も生徒の実態を踏まえることはもちろん、教材となる作品を大切にして単元を構想してみえます。今後もこのような実践から学びながら読むこと部会の研究主題にせまっていきたいです。

●これまでの実践によって「自分の考えの形成」の授業の仕組み方がより明らかになってきました。教材となる文章の特性を踏まえたうえで、付けたい力を確実に身に付けるための効果的な言語活動を設定していくことが大切になると考えています。今後も「自分の考えの形成」に重点を置いた実践を積み重ねていきたいです。

垂井町立不破中学校 Fjh40221@he.mirai.ne.jp

飛騨地区の先生方の実践

実践Ⅰ 川原 秀登教諭【高山市立日枝中学校】

単元名「論点を捉えて『幻の魚は生きていた』」（一年）

単元で育む資質・能力を「文章を読んで理解したことに基づいて、根拠をもって自分の考えをもつことができる能力」と設定し、言語活動を「環境破壊による生物絶滅についてどう向き合うか、自分の考えをまとめる」と位置付けました。単元導入時に環境問題を身近なものとして考えられるようにするための資料を提示して、「やってみたい」「できるようにしたい」などという意欲付けを図り、「考えなければならない」という学ぶ必然性をもたせることができました。

追究の際には、生徒の実態やそれぞれの考え方にあったヒントカードを用意し、生徒に筆者の考えを捉えさせたり、筆者の考えと生徒自身の考えとを関連付けて考えさせたりできるようにしました。

また、生徒に単元導入時の考えを書いたものと単元終末時に考えを書いたものとを比較させ、個々の考えがどう変容したのかをまとめさせることで、生徒に学びを実感させることができました。

実践Ⅱ 新井 良太教諭【高山市立国府中学校】

単元名「関わりの中で『モアイは語る—地球の未来』」（二年）

第二学年「読むこと」の指導事項エ「観点を明確にして文章を比較するなどし、文章構成や論理の展開、表現の効果について考えること」に重点を置いて指導を行いました。この力を付けるために、小集団で文章の論理の展開に着目して作品を読み、特徴を模造紙にまとめ、解説させるという活動を仕組みました。

生徒が主体的に読み、まとめられるようにするために、単位時間の導入時に、これまで学習してきた説明的文章の論理の展開に着目させ、論理の展開に筆者の意図があることに気付けるようにしました。結果、話し合いを進める中で、どのグループも筆者が意図した論理の展開についてまとめることができました。教師の発問などがなくても、生徒同士の対話を通して気付かせることができました。

また、既習事項のプレゼンテーションをする力を生かして、資料作成や発表原稿の検討を行いました。既習事項を生かす場があることは、生徒の主体的な姿につながったと感じました。

実践Ⅲ 青木 春日教諭【高山市立朝日中学校】

単元名「つながりの中で『星の花が降るころに』」（一年）

『読む』ためには、方法を知らなければならない。」と考え、「どこに注目し、どのように「読みとれば」よいのか」を身に付けさせるために、短い例文で練習をしてから本時に入りました。

物語全体から「悲しい」という感情が感じられることを事前に確認し、その「悲しさ」がどこからわかるかを考えさせました。その際には、「情景」「行動」「書き方」の三観点に注目させ、心情を読みとらせました。事前に行った例文の練習によって、どんな表

現に注目すればよいのかをつかませられたため、生徒は「情景」「行動」「書き方」という三観点を理解し、探すことができました。また、そこからどのような心情が読みとれるのかも考えることができました。読みとった部分から「心情」を考える以外に、「心情」から部分を探すという方法に手ごたえを感じました。

実践Ⅳ 澤上 大貴教諭【飛騨市立神岡中学校】

単元名「つながりの中で『星の花が降るころに』」（一年）

単元終末に物語の続きを書くという言語活動を設定し、適切な続きを書くために、登場人物や主人公の心情や関係の変化を捉えさせ、物語終了時点での心情、関係を押さえておく必要があることを理解させてから活動に入りました。中学校生活が舞台であることに加えて、続きを書くという活動が意欲の喚起につながりました。

また、読み取り場面で主人公の気持ちを心情曲線で表す活動を位置付けました。場面ごとに心情の変化を視覚化し、生徒一人一人の微妙な考えの違いが明らかになることで、交流が活発になりました。

実践Ⅴ 岡崎 みなみ教諭【下呂市立下呂中学校】

単元名「つながりの中で『月の起源を探る』」（三年）

個人追究を充実させるために、「小集団交流」の効果的な位置付けを図りました。小集団交流の位置付けにより、自分の考えになかった新たな視点で筆者の工夫を考えることができた生徒が増えました。

終末には、自己の変容を実感できる言語活動を設定し、筆者の説明における工夫を明確にとらえさせることができたため、どの生徒も自力で批評文を書くことができました。単位時間同士のつながりを意識し、終末に向かうことができました。

実践Ⅵ 野村 美咲教諭【下呂市立金山中学校】

単元名「つながりの中で『大人になれなかった弟たちに……』」（一年）

単元の出口として、「戦争時が舞台となるこの作品を作者が世に残した理由を読み取り、平和について自分が思うことを書きまとめる」という言語活動を位置付けました。生徒の三年時に、広島研修を核とした平和学習を行う際に、戦争を遠い昔の出来事としてとらえるのではなく、自分自身の生活や未来に大きく関わることを実感させたいという願いのもと、平和学習のスタートとして本単元を位置付け、学習に対する意欲を高めました。

単元の課題を「米倉さんは、なぜこの作品を世に残したのだろうか。」と設定し、作品が描かれた意図を考えることで、戦争について自分の考えを深めさせることができました。また、学ぶ必然性がある課題にすることが、自分の生活と関連させて、深い考えをもたせることにつながると分かりました。

個人追究においては、本文を載せたワークシートを個人追究や小集団交流に活用させることで、登場人物の行動や言葉、表現を根拠に考えをもたせつつ、共通の土台で追究できるようにしました。言葉を根拠に登場人物の心情を読み取らせたり、小集団交流の根拠をはっきりさせた意見交流につなげたりすることができました。